

## 2022 年(令和 4 年)ズワイガニ漁期前の資源状況

### ○漁期前の推定資源量(鳥取沖・隠岐北西沖・出雲沖)

松葉がに…前年・平年(直近3カ年平均)を下回る。

若松葉…前年並みで平年を下回る。

親がに(雌)…前年並みかやや下回り、平年を下回る。

### 1. 漁期前の資源状況の根拠となる情報

**試験船「第一鳥取丸」による調査結果** 10月12日～10月31日にかけて、山陰沖の水深185m～430mの海域において、合計28調査点で着底トロール網による漁期前調査を行いました(図1)。調査海域内における漁獲対象となるズワイガニの推定資源量(単位=万個体)は表1のようになりました。

表1 調査海域におけるズワイガニの推定資源量(単位=万個体)

区分	2019年	2020年	2021年	2022年	前年比	平年: 2019-21平均	平年比
松葉がに(甲幅10.5cm以上)	51.8	46.5	47.0	22.2	47%	48.4	46%
若松葉(甲幅10.5cm以上)	290.9	314.7	172.9	194.2	112%	259.5	75%
親がに(くろこ)	142.3	176.7	128.6	104.4	81%	149.2	70%

※くろこ：漁獲対象となる茶黒色や黒紫色をした卵を持ったメスガニ

**松葉がに：**2021漁期年は2020年漁期に比べ漁獲枚数が66%と大幅に減少し、前年の本調査結果は資源量が多く見積られていた可能性がある。この点を差し引いても2022年漁期年の漁期前の推定資源量は前年比47%、平年比46%となっており、昨年に引き続き資源状態が悪いことが伺える結果となった(表1、図2左)。特に例年、解禁時に利用される隠岐西方海域での減少が顕著であった。ただ、大きく減少した隠岐北西の海域の今年5月時点のズワイガニの分布状況は、漁獲サイズに当たる甲幅10.5cm以上の個体数が前年と比較してやや増加傾向にあり、調査海域以外に分布している可能性もある(図7)。前述の他、漁業者からの聞き取り等も含め総合的に考えると、前年から「やや減少する」と予想する。

また、甲幅12cm以上の大型個体(13.8万個体)が甲幅10.5～12cmの小～中型個体(8.3万個体)より多い結果となり、昨漁期よりさらに大型中心の水揚げとなると考える(図4)。

**若松葉：**出雲沖、隠岐北西沖、鳥取沖のいずれの海域でも前年よりやや増加し、前年比112%、平年比75%となった(表1、図2中央)。海域別では、例年どおり、出雲沖での分布量が多く、全体の6割を占めた。2020年漁期から漁期の短縮、1航海当たりの水揚げ枚数を大幅に減らす等の資源管理強化を行っている背景もあり、今漁期の水揚げも「前漁期並み」と考えられる。

サイズは甲幅10.5～12cmの個体は前年より増加(前年比125%)し、甲幅12cm以上の大型個体の個体は減少(前年比87%)した。小～中型主体の水揚げが予測される(図4)。

**親がに：**出雲沖で大幅に減少、隠岐北西沖でも減少し、鳥取沖では大幅に増加したことから推定資源量は前年比81%、平年比70%となった(表1、図2右)。出雲沖は、漁獲対象とならない初産個体のアカコ、漁獲対象となる経産個体のクロコ、未成体のマンジュウとが分かれてパッチ上に分布する傾向がある海域である。アカコの資源状況は前年並みであることから、本調査域から外れた海域にクロコがいる可能性もあるため、幅広に「前年並みからやや減少」と予測する。

サイズは、甲幅7～8cmの個体は前年より減少(前年比67%)、甲幅8cm以上の大型個体の個体は前年より増加(前年比184%)した(図4)。大型個体の割合が前年より高い水揚げが期待できると考えている。

## 2. 参考情報

- (1) 鳥取県の沖合底びき漁業による漁獲量の推移：本県のズワイガニ漁獲量は 2004 年に 1,587 トンまで増加したが、その後は減少～横ばいで推移している（図 5）。2021 年漁期の漁獲量は松葉がに 240 トン、若松葉 35 トン、親がに 292 トン、合計 567 トンで、前年（731 トン）及び過去 3 年平均（812 トン）を下回った。
- (2) 他調査の結果（調査月：5-6 月）：（国研）水産研究・教育機構 水産資源研究所（以下、水産資源研究所）は、日本海 A 海域（富山県以西）における 2022 年漁期当初のズワイガニ資源量について、カタガニ（松葉がに）、ミズガニ（若松葉）、メスガニ（親がに）とも、前年並みかやや上回ると推定している（図 6）。ただ、隠岐北方以西の海域では資源量の減少が確認されている。
- (3) 大型クラゲ：調査期間中に目立った大型クラゲの入網はありませんでした。

## 3. 今後の資源状況

水産資源研究所による資源評価調査（5-6 月）では、日本海 A 海域（富山県以西）における 2022 年のズワイガニ資源量は、近年では最低水準となった前年並みの推定結果となっている（図 6）。一方で、小型のミズガニ、アカコは増加している傾向が見られ、資源は回復途上にあり、2023 年漁期には雌中心に漁獲が回復することが見込まれている。

現状、漁獲サイズのカニの資源状況が厳しい状況ではあり、今後、漁獲サイズになることが見込まれる若齢ガニを保護するためにも、小型個体が多い海域では操業を控えるなど資源保護の取組みを継続していく必要がある。

**ホームページ** 本報告は水産試験場ホームページに掲載しています。トップページの「調査研究」からアクセスできます。

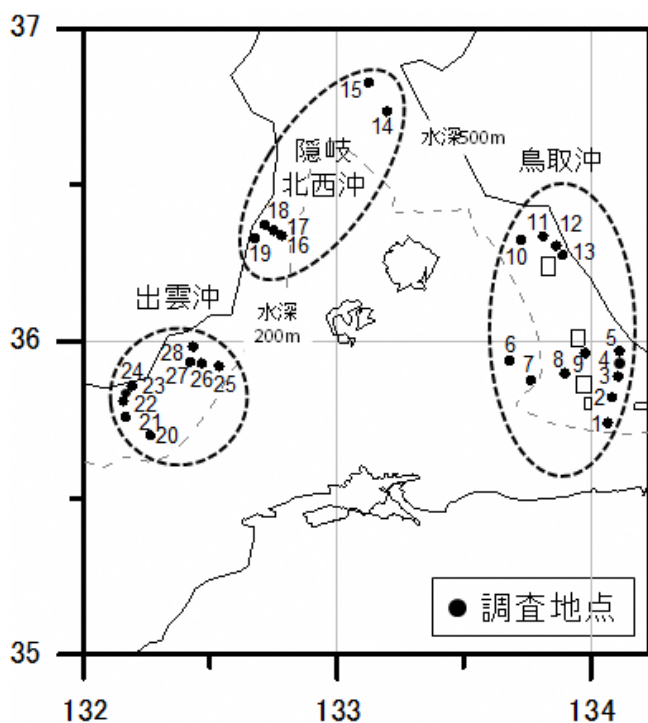


図 1 試験操業位置

### その他

2015 年漁期から松葉がにのうち、大きさ・品質・型とも最上級の松葉がにをトップブランド「特選とっとり松葉がに五輝星」として販売を開始しました。

（五輝星の基準）

大きさ	甲幅 13.5cm 以上
形状	脚が全てそろっているもの
重さ	1.2kg 以上
色合い	鮮やかな色合い
身入り	身が詰まっていること

2021 年漁期は約 42.4 万枚水揚げされた松葉がにの中から、215 枚（2015 年以降で史上最多枚数：平均 4 万円/枚）が五輝星に選定されました。本調査結果から大型の松葉がに（甲幅 13.5cm 以上）の資源量は前年をやや下回る結果（前年比 70%）となったため、前漁期よりも五輝星が市場に並ぶ数は、やや少ないと予想する。

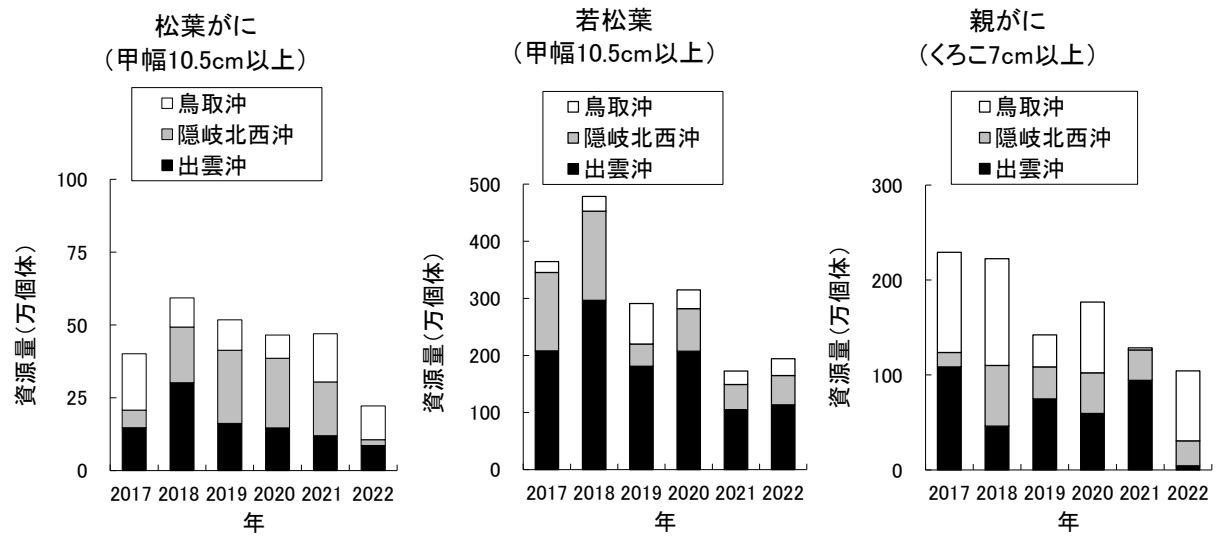


図2 年別海域別の資源個体数 (2017-2022年)

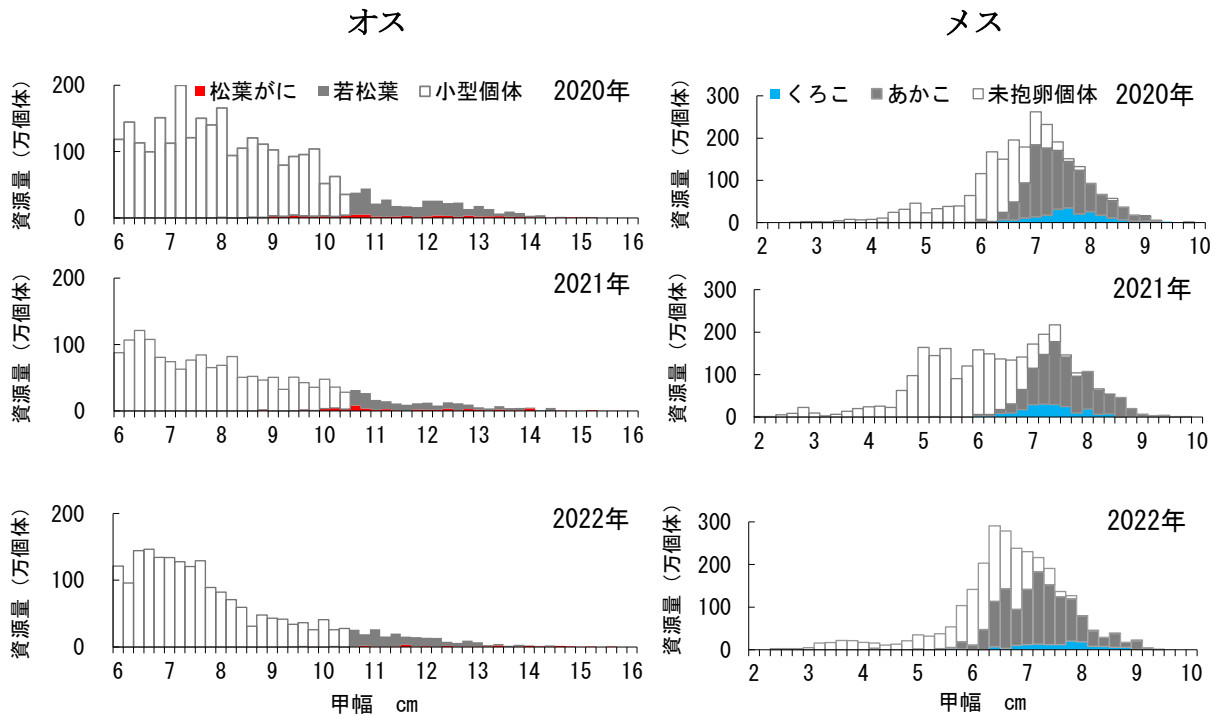


図3 調査海域全域におけるズワイガニ甲幅組成の推移 (2020-2022年)

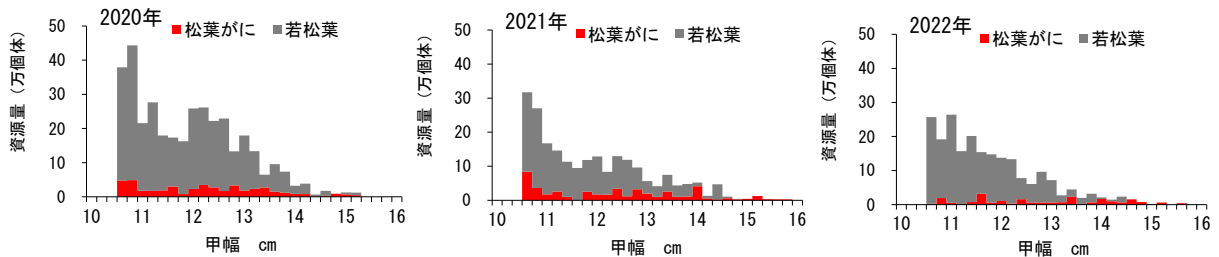


図4 調査海域全域における漁獲対象サイズ (甲幅 10.5cm 以上) の雄ズワイガニの甲幅組成の比較 (2020~2022年)

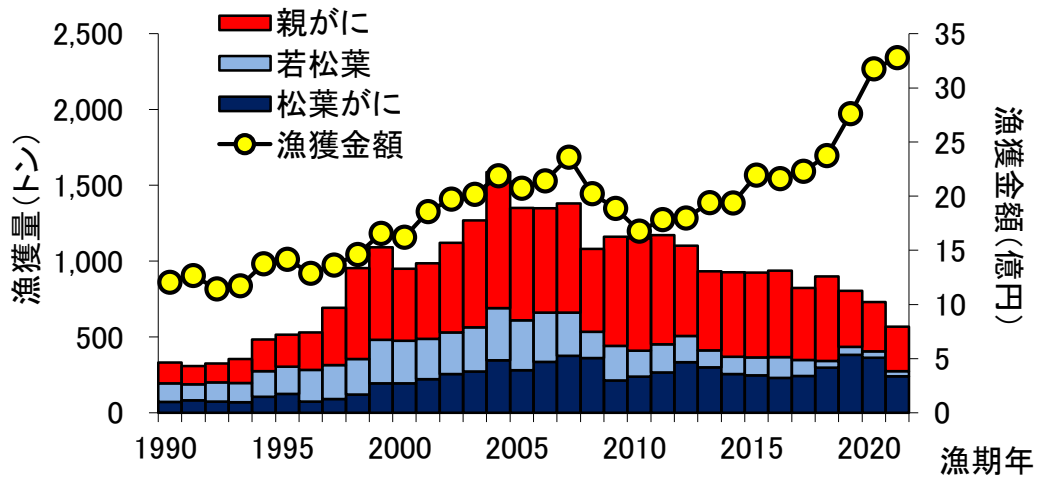


図5 鳥取県におけるズワイガニの漁獲量（漁期年：11月6日～翌年3月20日）

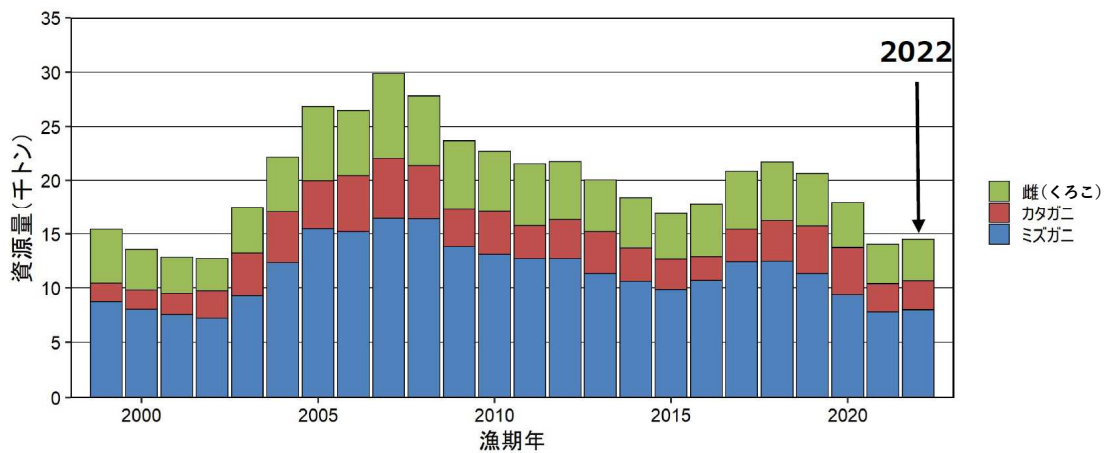


図6 A海域（富山県以西）におけるズワイガニの推定資源量  
国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所 作成資料

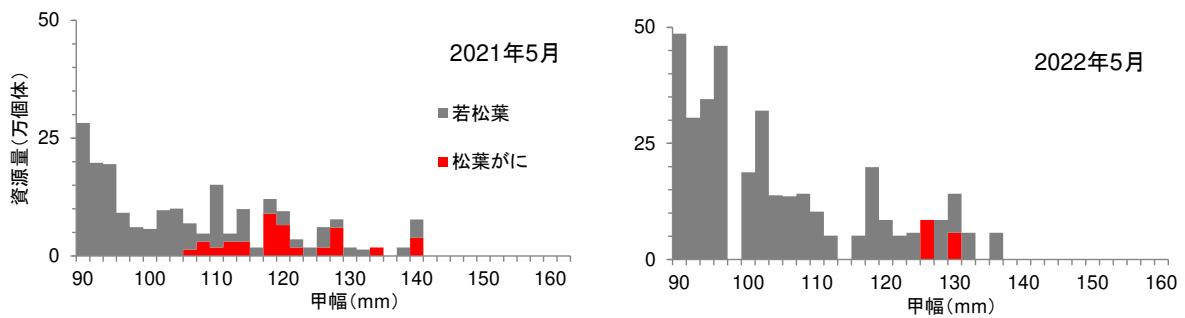


図7 2022年5月に実施した隠岐西方での雄ズワイガニの推定資源個体数（左2021年、右2022年調査結果の比較）